
異世界と遊ぼう

jouet

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界と遊ぼう

【Nコード】

N0630Z

【作者名】

jouet

【あらすじ】

不自由はしてないけど、一人さびしい女子大生の下に、アドリビ
トムの皆さんがトリップしてきました…。

嵐の前の・・・寂しさ

「ただいま」

返事はいつもどおり、ない。

私は靴を脱いでリビングに向かい、固定電話のスイッチを押した。

『ピー、メッセージ、一件デス』

再生。

『沙羅？お母さんです。元気にしていますか？お父さんもお母さんも元気です。学校はどうですか？まだしばらくは帰れそうにないけど、何かあったら連絡してね。なるべく帰るようにするから』

ピー、と機会音がして、母のメッセージは終わった。

私は三池沙羅。18歳の大学生。

父は考古学者の三池教授。で、世界中の遺跡やらを研究するために、大学でのデスクワークのために、家にはほとんどいない。

母は・・・小さいころこそ、一緒にいてくれたけど、私はもう子供じゃない。だから、父の助手に復帰して、夫婦仲良くあちこちへ行っている。

というわけで、私は「実家で一人暮らし」という、ちょっと妙な生活をしている。

金銭面には何一つ不自由していない（というのも、両親の仕送りが毎月すごい。そしてこんなにいらない）。

でも、挨拶を返してくれる相手がいない寂しさというのは……。

金 みずぐさん、私にはこだまもないんですよ……。

Plllllll...

『着信、東雲ぼたん』

友人…というか、悪友だった。

「ぼたん？」

『おー沙羅、借りてたゲーム、今から返すわ』

「…また唐突に」

『今近くまで来てるんだ、じゃ』

「…」

彼女は、いつもこう。

「ほれ、返したぞ」

「はいはい」

英語の文字が羅列したゲームソフトが手に渡る。

友人に進められるままはじめたゲームだけど、一通りやってしまうと、寂しさを紛らわしてくれなくなった。

「じゃ」

「お茶でもどう？」

「この後バイトなんだ、また明日」

…行っちゃった。

「…ふう」

ゲームソフトをその辺において、食事の用意を始める。

今日のメニューは…

「……素うどん、かな」

おいしいって言い合える人がいないと、料理は手抜きになるもの。
だしの元を取り出して、おなべを用意して…

どどどどどー！！！！！！！！！！ん！！！！！！！！！！

「ひいつつ！」

地震かと思ってテーブルの下に逃げ込む。

でも、…ゆれていない。

「……?」

3階から音がした（言い忘れてたけど、私の家は無駄に3階建て）。

「……お父さんの本棚……!?」

父の書斎は本の監獄。本棚は常にぎっしり。それが倒れたとなると……

「大惨事じゃないのぉ」

うどんはお預け。ため息をつきながら階段を上り、書斎を空けた。
ところがどっこい。

「……あら?」

なんともない。

「……お母さんのドレッサーかしら」

お母さんの衣裳部屋（通称）……も、なんともない。

「……」

現・物置にして、昔・子供部屋……それしかない。

「もう、いったい何が崩れたのよぉ」

私はドアを開けた。

土足は厳禁です

私は、ドアを開けた…。

「…え」

いくつか物は転がってるけど、そんなことは問題じゃない。

1、2、3、4、5……9。

9人。

「……」

「……」

「…間違えました」

「ちょ、ちよつと待って!」

ドアを閉めようとしたら、阻止される。

「お、俺たち別に怪しいものじゃなくて」

「…一人ぼっちってこんなに精神的にストレスかかるのね…」

「勝手に来たのは悪かったけど!でも俺たちも…」

「今日は早く寝ましょう…」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「スタン、ちよつと落ち着きなさい!」

女の人の、よく通る声でした。

「えっと…私はリフィル。リフィル・セイジと言います。仲間の手違いでここに飛ばされてしまったの。驚かせてごめんなさい」

「……」

「えっと…あなたは…」

「……」

どさつ。

目を開けると、物置で、いろんな人に囲まれていた。

「ひゃっ」

「あ、起きたよ」

紫の髪の小さい女の子が言う。

「見ればわかるっつーの」

赤毛の長髪の若者が言った。

「驚かせたのは事実だけど、気絶するなんて…」

さっきの女の人の声だ。

「改めて、あなたの話を聞きたいんだけど、良いかしら」

じつ、と9人から見詰められる。

女の子と赤毛さんに加えて…。

銀髪の女の子、金髪の鎧の人、ピンクの髪のかわいい女の子、

青い髪の…おでこが広い人、ライフルを持った年配の男性、

黒髪に青い服の女の子、茶色い髪に不思議な服の若者。

拒否権はなさそう。

「……とりあえず、靴を脱いでください」

埃の上に泥がついた床を見て、またため息をついた。

場所を移して、リビング。

頬をつねっても目は覚めないし、何より痛いので、厳格でも夢でもなさそう。

「…まず、何かからお聞きし、何かからお話すれば？」

お茶（私の大好きなゆず茶）を仕度しながら、話をする。

「そうね…あなたのことはなんと呼べばいいのかしら」

「…三池沙羅^{ミイケサラ}。沙羅でかまいません」

「そう。さっきも言ったけど、私はリフィルよ」

「…はい」

「早速だけど…ここはどこなの？」

「…そのまえに、なぜあなたたちはここに？」

「さっきも言ったとおりだけど、仲間がある実験をしていて、その失敗のせいだと思うわ。それで、ここに飛ばされてしまったの」

「実験？」

「信じがたい話かもしれないけど、私たちは異世界から来てしまった人間を預かっていて、彼らを元の世界に返そうとしていたの。けれど…」

「失敗だった、と」

リフィルさんはうなづいた。

「……わかりました」

私はそのへんにおいたゲームソフトを手にとり、ゲーム機のスイッチを入れた。

あー、男の人がライフフル構えてる。

「これ…見てもらえます？」

ゲームソフトは…テイルズオブザワールド・レディアントマイソロジー3。

「これは…！」

「どういうこと…？」

「うおお俺がいる…！」

「シエリア…」

「おい何なんだよ、どうなってんだよ！」

こっちが聞きたいわ…。

「…あなたたちは、私たちの世界で言う『御伽噺』の世界から来たのではないかと」

「おとぎばなし？」

「……ええ。あなたたちはそこから私たちにとっての『現実』に来了。
それこそ、世界を飛び越えて」

これからどうするの？

「そんなことが…」

「あなたたちの言う、仲間だって…世界飛び越えてしまったんでしよう？」

おそらく、ヴェラトローパーあたりのこと。

「ベルセリオスの大失敗というわけか…」

「つまりここは、異世界なのね」

「そういうこと…でしょうね」

あー、ゆず茶おいしい。

「…これおいしい」

紫ちゃんがお茶を飲んだ。

「私、ソフィ…よろしくね」

「こんにちは」

「…話を戻すわ。ここはどういう世界なの？」

「…魔法がない、魔物がいない、とだけは言っておきましょう」

「そんな世界があるのか？」

「ありますよ」

ここです。

「と、だけ？」

「国や地域によって情勢は違うし、宗教も言語も政治も違う。唯一の共通事項といたら、そんなもんです」

「なるほど…では、ここはどういうところなの？」

「ちよっと待っていてくださいね」

高校のころの地図帳を引っ張り出し、日本を指差した。

「まあ、ちいさい」

ピンクの髪の女の人がつぶやく。

「ここは、この小さな小さな国の一箇所です。名前は日本」

「ニホン？」

「この国は、戦争の永久放棄を世界に約束し、最低限の自由を国民に約束しています」

「まあ、すばらしい！」

「治安は…世界基準で見たら良いほうだけど、悪い人はどこにもいるものです」

「けしからんな」

騎士のお嬢さん、落ち着いて。

「ただし、悪いことをしたら刑務所…牢屋？に100%、収容されます。人の命を奪うこと、人の命を奪おうとすることは、硬く禁じられ、破ると重い罪が課されます」

「それはこの国の王が決めたのですか？」

「……法律は、国民の代表が決めたという形をとっています。言い忘れていましたが、この国の王はこの国と国民の象徴であり、政治の実権は持たない代わりに、私たちの心のよりどころである、ということになっています」

「政治の主権は、では誰に？」

「…20歳以上の成人男女です」

「なぜ20歳なのですか？」

ピンクさん、勘弁して。

「いろいろな約束事や文化は追々言つとして…私からひとつ、お聞きしたいんですが」

「为什么呢？」

「あなたがた、これからいったいどうするおつもりですか」

「どう…って…」

あ……考えてなかったんですね。

「…どつか泊まりやぁいいだろ？」

赤毛さん…。

「あなたたちのお金がここで使えるなんて思ってたませんよね…」

「な…！」

「野宿だな」

「絶対だめ！」

ライフルもって野宿してたら捕まります。

「どうしよう…？」

「どう…って…ルミナシアに戻る方法を見つけないと」

「どうやって？」

「それは…」

…あ、煮詰まった。

「…えーっと…」

「沙羅」

覚えておいてね、金髪の鎧さん。

「沙羅！急に来たのはあやまるし、びつくりさせてごめん！でも俺たちこれからどうして良いかわかんないんだ」

「おいスタン！」

「…スタンさんね」

「…あ」

そうよ、あなたたち名乗ってない。

「だから…」

「どうして良いか教えてほしい？」

「うん」

「…わからないわ」

「…え？」

みんなが凍りつく、そりゃそうよね。

「だって…そっちの研究者さんの間違いでしょう？私はそんなに頭がよくないし、どうしたらあなたたちを元の世界に戻せるのかわからない」

「なっ…テメー」

「ルークお止めなさい！沙羅…気を悪くしないで、彼は」

「いいんです…この状況下でパニックにならないほうがおかしい」

「ありがとう…」

「ごめんな、沙羅。俺もどうしていいか…」

力なくお礼を言ったりフィルさんの気持ち、悲しそうに笑うスタンさん、いらいらしているルーク…。

「…もう一度言います。私は、あなたたちが元の世界に戻る方法を知らない」

「…」

「…でも、雨露をしのぐ場所と衣食を保障することはできます」

「…えっ」

「おい本当か？」

リフィルさんと騎士のお嬢さんが聞き返す。

「そんななりで外フラフラされても、私も後味悪いです。だから、この世界のルールを守ることさえ約束してくださるなら、この家で寝泊り食事してくださって構いません」

「あなた、本気で言っているの？」

驚いたような顔をするリフィルさん

「不都合ですか？」

「…小娘、お前には危機感つてもものが無いのか？」

「三池です。えっと…」

「リカルド・ソルダートだ。…ミイケ、お前はいきなり現れた見ず知らずの人間を泊めるのか？」

「…言い忘れていました。この国、日本では一般人の武器の所有を硬く禁止しています。刀、銃、剣ももろの類は役所に届出をして審査で認められなくてはいけません。あなたたちはこの国の人じゃないから戸籍もないし、届出もできない。その状態で出歩いては、まず間違いなく刑罰の対象です」

「…」

「それに、この国で通じるお金も持ってないでしょう？あなた方が捕まったり、のたれ死んだりしたら、御伽噺が変わってしまうかもしれない。私はそれが怖いんです」

もつともらしくそれっぽいことを言ってみただけけど、事実。

「リカルド、私たちは今は彼女を頼るよりほかに手がないわ」

「……」

沈黙を破ったのは、ルーク君。

「もーなんでもいいだろ！面倒だから俺はここで我慢してやる」

「そんな言い方……」

ソフィちゃんがたしなめる。

「信用しろとも、感謝しろとも言いません。ただ、どうするのが良いかはあなた方で決めてください」

「私は、沙羅を信じます。私はエステリーゼ・シデス・ヒュラッセイン。エステル、と呼んでくれます？」

「沙羅、よろしくね」

「ルーク君、ソフィちゃん、エステル姫は決まりですね。あとは……」

「ありがとう、沙羅！俺もお世話になるよ」

「俺はチエスター・バークライトだ。世話になるぜ」

「スタンさんにチエスター君ね」

「すまないが、世話になっても良いか？私はクロエ・ヴァレンス。名門ヴァレンス家の者だ」

「俺はカイウス・クォールズ……本当にいいのか？」

「構わない、って言ってるでしょう？……リフィルさんに、リカルドさんはどうされます？」

「仕方ないわね。迷惑をかけるでしょうけど、お願いするわ」

「ただ飯を食わせるとは言わねえ。それ相応の働きはしよう」

「決まりね」

おなかすいたね

2階の空き部屋たち…。

「いつお父さんやお母さんが帰っても良いように掃除しておいてよかった。」

「ルークには一（わがまま防止のため）一人部屋を使ってもらう。元々は来客用だったんだけど、いいよね。」

「とりあえず、9人全員にベッドを支給することはできないので、布団を敷く、」

「手伝うよ」

「あら、いいの？」

「だって、お世話になるんだし」

「俺も手伝う」

「スタンさんとカイウス君が手伝ってくれた。」

「こっちの部屋は女性陣に」

「2階のプレイルーム…昔はここで友達を呼んで遊んだっけ。」

「こっちはルーク君以外の男性陣ね」

「和室…お母さんの趣味だ。」

「沙羅、ここは何です？」

「厨房ですよ」

「某番組ではない。まあ、エステル姫には通じないだろうけど。」

「…これは？」

「それは電子レンジ、そっちは冷蔵庫、それからこれは食器洗浄器」

「メニュー変更。今日はカレー。」

「お手伝いするわ」

「リフィルさんはお客様です」

「エステル姫と二人でキッチンから追い出した。」

「あ、ついでに言いますけど、ここがお手洗いです。こつちが男性、こつちが女性」

「ありがとう」

「で、こつちがお風呂です」

「男女別じゃないのか？」

「ギルド？とは勝手が違うのよ、スタン」

あれこれと説明をする。

「だーーーーもうっ！」

「ファブレ！」

「退屈だつてーの！何かねーのか！」

「はいはい」

リカルドさんの舌打ちを他所に、お坊ちゃんのところへ行く。

「これで我慢して」

テレビさんヘルプ。

「……………なんだこれ」

「テレビ」

ちなみに、お父さんが買ったプラズマ大型。

「なんで板の中に人が入ってるんだ！こいつらは大丈夫なのか！？」

クロエさん落ち着こう。

「これは遠く離れたところでやっていることを、特殊な信号で家庭で見られるようにした装置です」

「へええええ……」

「ねえあなた、これで私たちの世界の様子も」

「見れません。この世界のことだけ」

期待させてごめんなさい。

「お手伝い……」

「あら、ソフィちゃん」

「何か、するね」

「じゃあ、お皿を運んで」

「うん」

「何か手伝います?」

「エステル姫:じゃあそのスイッチを」

「これですか?」

「ええ」

「...これ、何です?」

「炊飯器。ご飯をふっくらにする機械です」

「何か手伝おう」

「...クロエさん。では、その箱を取ってください」

「これか?...なんだこれは」

「カレー粉です」

「お手伝いするわ」

「リフィルさんもうできましたから」

「へえ、まあ食べそうじゃねえか」

「好みはわからないから、ごく一般的な味だけど」

「ありがとう、沙羅」

「じゃ、召し上がれ」

「.....いただきます」「」「」「」「」「」

「.....召し上がれ」

この家で、誰かと食事なんて久しぶり。

お父さんとお母さん、今どうしてるだろう。

ご飯は口に合うものを食べてるのかな、

変なものを食べておなか壊してないかな、

日本食が恋しくなっていないかな...

「…沙羅？」

「え、あ！何？」

「…おかわり」

「早っ！」

「俺も！」

「俺も」

スタンさん、カイウス君、チェスター君がお皿を突き出した。

食料を増やす必要があります

「お皿洗いますね」

「じゃあ、おなべとかまな板だけお願いしますね」

他のお皿は食器洗浄器へ・・・。

「これ、なに？」

「あ、ソフィちゃ・・・」

「すごい、これ、なに、え・・・」

まあ、これがある家庭もまだそんなに多くはないだろうし・・・。

「これがあつたら、クレアもロックスももっと楽になるでしょうね」

「これ、どうやって動くんだ？」

エステル姫とチェスター君も見にきた。

「ここにある大抵のものは電気で動いてるの」

「電気・・・？この世界にもヴォルトがいるのか？」

「いないから、人工的に作り出してるの。それを各家庭企業にこうして送っているわけなんだけど・・・」

「どうやって作ってるんです？」

「いろいろ手段はあるんだけど・・・あなた達の世界に応用はできなさそうよ？」

質問攻めに応えている暇はないので、適当にかわす。

（インスタントでいいわよね・・・？）

お茶とコーヒーを淹れて、ごまかした。

おしゃべりは嫌いじゃないんだけど、私は電化製品に詳しくはないから・・・。

「うううん・・・」

「沙羅、どうした？」

「ああ、クロエさん・・・あのね、食料がちょっとピンチかな、って」

いきなり9人増えたんだから、当たり前。

「そうか・・・すまない、苦勞をかけるな・・・」

「そうじゃないの、私、この家に一人だから、必要最低限のものだけ買うようにしてたの。足りなくなつて当然だわ」

「そうだったのか・・・その・・・」

聴きにくそうに言葉を濁す彼女。

「両親のことなら、健在よ」

「え、そうなのか？いや、しかし、女性が一人でこんな大きなところに一人なんて・・・召使や女中も見当たらないし・・・」

「そんな余裕ないわよ。両親とも忙しくて家に帰れないだけ。私は、しつかりこの家を守つてるのよ」

「そうなのか。しかし・・・いろいろ、物騒じゃないか？」

「魔物もないし、セキュリティ・・・防犯も心がけてる。何より、ここは私が生まれ育つた家だから、離れたくないのよ」

「・・・良いご両親なんだな」

「まあ、娘が生活に困らないように保障はしてくれるしね。というわけで」

金庫から諭吉さんを1枚取り出し、お財布に入れた。

「私、食料品の買出しに行ってくるから・・・皆さんに、絶对外に出ないように言っておいて」

「外出はダメなのか？」

「皆さん、いろいろ剣とか銃とか持つてるでしょ？さっきも言ったけど、この国だと、それは持つただけで刑罰の対象なの。だから、武装して外出は不可能なのよ」

「厳しいな・・・」

裏を返せば、それだけ平和ボケつてことなんだけど・・・そのあたりはおいおい話そう。

「お願いね」

「わかった」

さて、コートを羽織つて、カバンに財布と携帯を入れて、鍵も持つ

て・・・

「沙羅、外出か？」

「あ」「あ」

カイウス君が私達を見つけた。

「クォールズ、私達は留守番だ」

「何だよ。ちょっと出歩くぐらい・・・」

「だめだ！ここでは私達は沙羅の世界のルールに従わなくてはいけないんだぞ」

「少しぐらい良いじゃんか！」

ケンカ・・・？

それは困る。この人たちのケンカは手が出るところか武器や魔法がでるんだから！

「わかった、わかったわ」

「さ、沙羅？」

「ほーら」

「た・だ・し」

ピン、と指を立てる。

「剣はクロエさんに預けること。このコートを上から羽織って、消して人前で脱がないこと。何があってもひとりですら行動せず、私の指示に従うこと！」

「・・・え？」

一気に私に言われて、カイウス君が固まる。

「それが守れないなら留守番！」

キツイ言いかたしてごめんね。でも、あなたのためでもあるのよ。
「う、うん・・・わかった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0630z/>

異世界と遊ぼう

2011年12月5日21時54分発行